

昭和初期の嵯峨における 風景の価値評価に関する研究

Evaluation of the landscape in Sagano, Kyoto
in the early years of the Showa era

山口 敬太¹・水谷 肇²・出村 嘉史³・川崎 雅史⁴・樋口 忠彦⁵

¹学生会員 京都大学大学院工学研究科 博士課程 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4)
E-mail: Keita.Yamaguchi@t23x1791.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

²学生会員 京都大学大学院工学研究科 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4)

³正会員 工博 京都大学大学院工学研究科 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4)
E-mail: demu@art.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

⁴正会員 工博 京都大学大学院工学研究科 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4)
E-mail: kawa@art.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

⁵正会員 工博 京都大学大学院工学研究科 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4)
E-mail: higuchi@urban.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

For the landscape planning, it is necessary to reveal how people have been appreciated and conserved the landscape. In the early years of the Showa era, the evaluation of the landscape in Sagano had been changing. Guidebooks showed some new objects of sightseeing, and Otsuka and other writers began to describe the beauty of the landscape of Sagano, not in a traditional way. Administration also began to conserve the landscape especially its natural environment with the intension of economic development, as seen in the Ogurayama Park planning. This paper aims to examine that how people appreciated the landscape of Sagano in that times, with the analysis of historical material as guidebooks and notes for tourists, and administrative documents concerning the landscape conservation in Sagano.

Key Words : *landscape, conservation, environmental design, scenic beauty, Sagano, Kyoto*

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

「持続可能な開発」が唱えられて久しいが、近年、風景や景観づくりにおいても「持続可能」であることが重要であると認識され始めた¹⁾。地域固有の風景の価値を後世に残す都市整備が望ましいが、風景の価値は時代や人によって異なり、その価値基準が曖昧であるために、どの程度風景を保全するかといった問題が常に重要な論点となる。

昭和初期は、都市郊外とその風景が新たに価値を見出され、同時に行政による風景の保全と利用が活発になった。本論では、京都の代表的な景勝地である嵯峨野²⁾を対象として、当時の作家や行政など、それぞれの立場によって異なる風景の捉え方を明らかにし、今後の持続可能な風景づくりを進める上で何らかの知見を得ることを目的とする。具体的には、①昭和初期の観光案内記や随筆に描かれた風景の記述の分析によって、重要とされた

風景の要素とその評価について考察を行う。また、②同時期の行政による風景保全運動に着目し、関連する文献・史料の分析から、行政の風景の保全と利用に対する考え方について、①と関連づけながら考察を行う。そして、当時価値ある風景として捉えられていたもののうち、どの程度保全施策の中に位置づけられたかについて考察する。

(2) 本研究の位置づけ

本論に関連する既往研究としては、近代における名所観の変遷に関するもの³⁾があり、これは名所案内記を資料として近代における江戸の名所の変容について述べたものである。勝原の研究⁴⁾は風景論に関する文献や教科書の系譜から近代の風景論を論じている点で参考になる。また、近代の武蔵野の風景における國木田独歩の影響について論じたもの⁵⁾があり、これらも近代の風景観の新たな側面を論じたものとして参考になる。昭和初期の景観保全行政に関するもの⁶⁾は、当時の行政の風景に対す

る考え方を明らかにしている。嵯峨野の開発や風景の変遷に関して論じたもの⁷⁾は存在するが、近代以降・戦前までは扱っておらず、また風景の評価についても論じられていない。ある時期のある場所に注目して、様々な側面から風景の価値評価の全体像を捉えようとした研究は多くない。本論は先行研究の成果を踏まえた上で、昭和初期の嵯峨において、人々が風景に関わる様々な動きを、「風景の価値評価」という視点で論じるところに独自性がある。

2. 近代における嵯峨野の風景の評価

(1) 観光対象としての価値

昭和初期の嵯峨において、観光対象として重要視されていたものについて明らかにする。本項の分析にあたっては、資料として観光案内記を用い、その記述内容の分類とその内容の考察を行う。また、各見出し（名勝）に関する記述の数量調査（行数・文字数による記述量の集計）を行い、それぞれの名所における鑑賞対象の重要度を定量的に把握する。資料として用いる観光案内記は『京都名勝誌』（京都市編纂、1928）である。理由は『京都名勝誌』が京都の行政側における観光案内記のベースとなった『京華要誌』（1895）を増訂したもので、当時最も内容が充実していたからである。

『京都名勝誌』の本文中の記述を各見出し（観光対象）とその内容ごとの記述量を示したものが表1である。見出しをその特性によって整理すると、主に神社仏閣、歌枕、旧跡の3つに分類することが可能であった。観光対象として歌枕・旧跡が神社仏閣と同程度数取上げられており、当時の嵯峨野の観光対象として、神社仏閣と同様に歌枕・旧跡が重要視されていたといえる。これらの他には、明治始めから外国人観光客を対象として盛んとなった保津川の川下りや、嵐山公園が挙げられており、これらは近代以降の比較的新しい観光対象となっている。

各観光対象の記述内容は、①名勝説明、②鑑賞対象、③歌や文学作品からの引用、④その他の景観の記述、の4つに分類できた。名勝説明についての記述は主に歴史や縁起、人物、年中行事があり、鑑賞対象についての記述は主に建造物、景物、庭園、什宝があった。その他の景観の記述には俯瞰景を中心とする眺望の記述が多かったが、「画中の景（祇王寺）」や「古昔の遺風（野宮）」など、その景色の特徴を記したものもみられた。また、本文中の図には図会でなく写真が用いられた。

さらに記述内容について詳細に見ていくと、①神社仏閣については建造物や什宝に関する記述が多いこと、②歌枕・旧跡に関しては記述中、歌や文学作品の引用の割

合が多いこと、③陵墓に関する記述が多いこと、が挙げられる。神社仏閣の鑑賞対象として建造物や什宝が重視されていたことについては、古社寺保存法や国宝保存法の制定など、古社寺や古器旧物など文化財の保存に対する意識の高まりが指摘できる。歌枕や旧蹟に歌や文学作品の引用が多いのは近世以前からの特徴を継承しているといえる。陵墓に関しては、皇室の史蹟保存と天皇制との関係が指摘されている⁸⁾ように、政治・社会的背景が大きかったと考えられる。

このように、昭和初期になると、神社仏閣は参詣の対象であるとともに、その建造物や什宝に文化財的な価値が見出されていた。また、古くからの歌枕の地や旧蹟は鑑賞の対象として継承された。嵯峨野は戦前まで市街地化が進まず、その景観が多く近世以前の状態のまま残されていた⁹⁾（図1）こともその要因であろう。さらに川下りや公園などの近代以降の新たな観光対象が生まれていた。

表1 『京都名勝誌』の記述の分析

記述量 (行数) 1行40字	名勝 (見出し)	名勝分類	名勝説明			鑑賞対象				文学 歌や 物語 引用 (首)	その他 景観 の記 述
			歴史 縁起	人物	年中 行事	建 物	景 物	庭 園	什 宝		
36	清涼寺	寺院	12		9	12			3		
35	天龍寺	寺院	14			10		6	5		
28	大覚寺	寺院	13	3		8			4		
23	二尊院	寺院	10	4		5	1		3		1
19	法輪寺	寺院	7		4	6	1		1		1
17	愛宕神社	神社	9			5	1		1	3	1
17	鹿王院	寺院	6			6			5		
11	臨川寺	寺院	5			5		1			
8	大悲閣	寺院	3	2		1			1		2
23	嵐山 注)	歌枕(山)	3			3	10			5	3
12	愛宕山	歌枕(山)	7							3	1
7	廣澤池	歌枕(池)	4				2				
7	遍照寺山	歌枕(山)	6						1		
6	大澤池	歌枕(池)	2				1	1		2	
6	小倉山	歌枕(山)	2				1			3	
6	清瀧	歌枕(川)	3			1				2	1
26	嵯峨陵墓	旧蹟(人物)	18			4	3			1	
9	厭離庵	旧蹟(文学)	4							2	
7	小楠首塚	旧蹟(人物)	5	2							
5	落柿舎	旧蹟(人物)	1	2			1			1	
5	祇王寺	旧蹟(文学)	2			1			1		1
5	野の宮	旧蹟(人物)	2	2		1					1
5	小督塚	旧蹟(文学)	2								
5	千鳥淵	旧蹟(文学)	3				1			1	
15	保津川	川下り	3	2			2			1	5
6	嵐山公園	公園	3				3				

注) 記述量は行数（1行＝約40字）による。ただし表の掲載は行数5行以上のものに限った。また、「嵐山」の多くの小見出しを含むため、それらを区別して表記した。

(2) 伝統的見方をこえて発見された嵯峨野の風景

嵯峨野における近代の風景の見方をよく示しているのが、昭和初期に発行された随筆型の観光案内記¹⁰⁾（以下随筆）である。近代以前の名所案内記や紀行文とは異なっており、これらは散策時の手記のような形をとって道の上を視点場とした風景について多く描いている。それまでは歌枕や名所の景色が主な鑑賞対象であったが、名所の

景色と同様にその周囲の風景を重視し、「野の道、山の道を歩くことだけでも、嵯峨野に遊ぶものの喜びであるといはねばなるまい¹¹⁾」というように名所周辺の野の道からの眺めが重要な鑑賞対象として意識されはじめた。本項では、昭和初期の随筆（A：北尾鯨之助『京都散歩近畿景観5編』（1934）、B：大塚五郎『嵯峨野の表情』（1939）、C：『京都風土記』（1942）、D：高桑義生『洛西景観』（1947））に描かれた作家らによる散歩時の風景の記述に着目し、國木田独歩の『武蔵野』¹²⁾（1898）との比較を通して、当時の作家らによる嵯峨野の風景評価の特徴を明らかにする。

（a）武蔵野と嵯峨野の比較

大塚は嵯峨野の風景を描写する際に頻繁に國木田独歩の『武蔵野』を取りあげている。例えば武蔵野が独歩によって有名になったことを挙げ、「嵯峨野が何故もつと人々の魂を吸ひ寄せないのか私には不思議でたまらない」と漏らしている。当時嵯峨野の野の風景はそれほど人々の関心を寄せてはいなかったと考えることができる。これらのなかで大塚は、武蔵野の「広さ」や「明るさ」、「多彩な変化」に対して、嵯峨野の「古人の魂」や「山と野が描く景色」、「竹林のひそけさ」、「時雨の閑寂さ」などを挙げながら、広く人々に愛されている武蔵野と比べても遜色ない程に、嵯峨野が独自の魅力に溢れていることを訴えようとした。ただし、『嵯峨野の表情』（1939）の発行時には、嵯峨野はまだ近代以前の環境を多く残していたが、武蔵野の環境は大きく変容していた。ここで大塚が嵯峨野と比較したのは物理的環境としての武蔵野ではなく、独歩が描いた武蔵野であった。

國木田独歩の『武蔵野』における風景の見方の変化については『郊外の風景』¹³⁾で述べている。そのなかで本稿に関連する点について整理すると以下の二点が挙げられる。

- （1）独歩は、あてのない散歩で、目の前に次から次へと継起し、展開する光景を楽しみ、名所という特定の場所からも自由になった。その独歩は武蔵野の空間的な広がりこそ関心があった。
- （2）夏の小金井の風景を、小金井といえばという春の桜からも従来の江戸の景物からも離れて「夏の日の光」に見たように、独歩は名所の枠、伝統的景物という枠から離れて、もっと自由な目で景色を見ようとしていた。

では、それに対して大塚らが見出した嵯峨野の風景の価値とは何であろうか。

（b）嵯峨野の道の風景

大塚は、広い武蔵野に対して、「嵯峨野にはさうしたやうに迷つて困る道はない」としながらも、その道の平明さを破るものとして、竹林や山々、農民や牛の姿を挙

げ、「嵯峨野に遊ぶ人達は、その狭いことを決して嘆いてはいけない」と主張する。嵯峨野は狭いながらも、その道は様々な異なる表情を見せるというのである。

独歩は武蔵野において特定の道を楽しんだわけではなく、武蔵野の空間的な広がりに関心を寄せた。それとは対照的に、大塚はそれぞれの嵯峨野の道を追体験できるほど非常に詳細に示し、それらを区別した。それは例えば、「野々宮から落柿舎かけて、落柿舎から中院かけての竹林の道（は確かに美しい。）」「（人々は）常寂光寺から亀山にかけての道（を愛しないではみられないだろう。）」のような道であり、それぞれの道には異なる魅力的な風景が見出された。

以下では、大塚をはじめとする作家らによる随筆に描かれた嵯峨野の道の風景に着目し、特に重要であったその構成要素と印象の記述を読み取ることで、彼らの風景評価を明らかにする。分析は以下の手順で行った。すなわち、1)複数の随筆から嵯峨野の道の風景に関する記述を分析対象として選ぶ。ただし、これらの随筆はその記述方法がほぼ同様であったため、資料として同等に扱った。2)1.のうち、道の風景に対する筆者の「印象」の記述を抽出し整理を行った（表2）。筆者らが取上げた道を地図上に示したものが図1である。



図1 大塚らを取りあげた嵯峨野の道
昭和11(1936)年1/3000都市計画図（京都市土木局都市計画課）を用いた

表2 昭和初期の随筆型観光案内記に記述された嵯峨野の道の風景

取上げた嵯峨野の道 (アルファベットは著書)	嵯峨野の道の風景	筆者による風景の印象
野宮から落柿舎にかけ、落柿舎から中院にかけての竹林の道 (B C) 天龍寺から二尊院に行く竹林の道 (B)	①閑寂な息吹 ②一株二株の椿の花 (春)、一本二本の梅の花 (春)、 ③竹の皮を拾ふ農婦の姿 (夏)、 ④緑青色の若竹の肌ざはり、 ⑤時雨の雨が湿り勝な道 (秋)、 ⑥竹と竹とすれ合ふ音のかすけさ、 ⑦雪の上に日差しを透して萬竿の竹が織り成す縞模様的美しさ (冬)	①美しくひそまつてゐる ②静かな竹林の道にぼつかりと灯をともして、 ③思いがけない絵を描き出して、 ④水よりもずいずい ⑤一層しつとりと落ち着かせて、 ⑥時雨と紛る程の寒さ ⑦冬の景物の随一
① 野宮から落柿舎に抜ける道 (D)	①ほの暗い中から出て、明るくひらけたなごやかな山と野の、変化のある色彩 ②太陽の光に輝いてゐる自然のすがた ③青麦も菜の花も野の草も樹立、山々、点在する家々 ④野道、溝がさらさら流れて ⑤(溝淵の)たんぽぽまねげ (春)、みぞそば 蓼の花 (秋) ⑥田や畑に働いてゐる人達 ⑦翠緑の小倉山裾の風景、すぐれた山容 ⑧手前一面の茶畑で、その中に茶を作る粗壁の家が二棟、風情のある形で並んでゐる	①②更に美しくたのしい ③みんな美しい ④やさしく美しい、風情あるもの ⑤心をひく ⑥やさしい姿 ⑦美しい ⑧この景観はいつもわたしの心をひく。恐らく上嵯峨追道に出会う美しい景観の一つであると思ふ
② 常寂光寺から亀山にかけての道 (B)	その道の半は隠り沼に沿つた榛の道、その道の半は赤松の道 ①狐色に枯れた葉 ②時雨などの渡る音、大和絵めいた赤松の美しさ、 ③さし交はした枝の間から仰ぐ空の美しさ、 ④赤松の木立を透して見下ろす嵐峽の碧潭は正しく一幅の絵、 ⑤小倉山の松の翠をひたした沼の静けさ、朝の霧を湧かせ、夕べの霧を沈ませる、 ⑥春蟬 (春)、蛸 (夏)、百鳥のこゑ (秋から冬)、灌木の花	①秋の明るさを漂はせて心の底までもにほひをしみこませる、 ②夢のやうなひそけさに誘ひ込む、 ③心を楽ませてくれる、 ④見る人をして讃嘆せしめずにはおかぬ ⑤妖しさをこの沼は持つてゐる、 ⑥四季折々につれてそこはかたない彩を点じて目を慰めてくれる
(同上) 小倉山の麓の方 (A)	①広葉樹林の美しい色彩 ②赤松林の緑は、秋の楓葉を引立てる大きな屏風 ③常寂光寺の門前から、西を見た嵐山の形	①さながら画を行くやうな気持ち ②悠大である ③風情があつて面白い
(同上) (D)	①裏道ともいふべき、嵯峨野を知つてみて静かに逍遙する人だけ ②榛その他の雑木の疎林	①好んで歩く道 ②武蔵野風景を思ひ出させる
③ 鳥居本のところから右に折れて東の方、大覚寺の方へ出て行く道 (A)	おびただしい野芒、後はよく逆光線に芒の穂が真白に光つて、赤い鳥居と白い石橋、山裾をこんもりと包んだ竹林、小石の多い道がさつと過ぎ行く名物北山の時雨に濡れて光っている	昔の嵯峨野らしい感じを持つてゐる ほんとうに透徹した嵯峨の秋を感じる
(同上) (D)	田や畑の間の径を行きたい方向へ行つて見る ①鳥居本に行く裏道や、ちょっとした處に	四季いつに限らず、歩いてよい處である ①心にいい風景がある
釈迦堂を南にながめ、小倉山を前に見て、野道を西へ出る道 (D)	①西から北にかけての山のたたずまい ②そこらに点在する野の家のさま ③静かに農耕にいそむる人の姿	この野道はどんな時も、心の晴れ晴れとする道 これこそ昔ながらの嵯峨野の道 ①②③自然の美しさで温雅な気分、何とはなしに心に触れるものがある
④ 祇王寺門前の道 (A)	愛宕街道の表側からあの敷垣に沿つて屋でもなほ薄暗い木下闇	風情がある
(同上) (D)	①道は細く細く竹むらを縫つて行く ②鶯の笛啼 (初冬) ③早春の竹林の明るさ	①竹の青さが浸みとほつて来るやうな ②しんかんとした気分 ③ほのぼのとした などが忘れられない
⑤ 嵯峨野の道 (油掛地藏附近の道) (B C)	①愛宕から北山にかけて幾段にも重なり合つた山々を眺めながら歩く野の道 ②所謂野の趣 ③山茶花の美しく咲き澄んでゐる庭先 ④しろじろとすかれた紙が乾かされてゐる光景	①風情も捨てがたい ②むしろ東よりのこの辺に豊かである ④息を思ひて、紙の白さにたき込まれた秋の感情を受け取る
(油掛地藏の北西の道) (C)	つゆ草の道、野をへだてて低くつらなる北山、褐色の山肌	
(油掛地藏の西の道) (C)	コスモスの道、小川沿ひに燃えたつ椿や樺の並木 豊かな水を湛へた野川さへも添うてゐる道、いとおゆる野の果ての山といふ程の感じまでは無くともそれらの山の影を追つて曲折する道	人を飽きさせはしない
⑥ 広沢の池から道を北にとつて、北嵯峨へはいつていく道 (B C)	①どこかで鳴いてゐる牛の鳴き声、 ②山ふところに点々と立ち並ぶ農家の白壁、 ③堇や蒲公英 (春)、野菊や露草の美しい道 (秋)	閑寂さも忘れがたい ①さまで広くもない野を何か広々と、そしてほのかなものにする ②ひどく印象的ななつかしさを思はせる ③どこかほつこりとしたやうな温かさを感じさせられて飽きることを知らない
(同上) (A)	稲田、かけ稲の屏風、ところどころに小さい丘、柿の木、細い夕煙り、鐘の音、働く人	惹きつけられる
⑦ 大覚寺裏から直指庵の前を通つて登る山の道 (B C)	真青な竹林の中、灌木にはさまれた石ころ道 ①所謂嵯峨野が目下一眸のうちに見晴らされ ②この池沿ひの雑木林の道	行く人も稀なだけに風趣が深い ①幾度か人の足をとどめさせる ②さびさびとして嬉しい

武蔵野の広さに比べると嵯峨野は非常に狭く、道も限られているが、嵯峨野の道はそれぞれ異なる魅力があった。大塚や高桑らにとって、名所と名所の間をつなぐような野の道（①, ②, ④, ⑦）は名所の景色にひけをとらない程美しいものであった。また、彼らによって、それまで嵯峨野では鑑賞の対象とされてこなかった平凡な農村の道（③, ⑤, ⑥）の風景が魅力的に描かれた。

表3 大塚らが描いた風景とその構成要素

風景のタイプ	構成要素
四季の景物	草花 春：椿、梅、堇、蒲公英、菜の花、れんげ 秋：枯葉、野芒、野菊、露草、みぞそば、夢の花、秋桜／冬：鶯の笛啼、山茶花
	樹木 樺の道、赤松の道、雑木林の道、雑木の疎林、竹林、椿や樺の並木、柿の木、
農村	集落景観 点在する家々、粗壁の家、赤い鳥居と白い石橋、農家の白壁、山ふところに点在する野の家のさま
	農業景観 茶畑、稲田、かけ稲の屏風、細い夕煙り
	添景人物 農婦、田や畑に働いてゐる人達、農耕にいそしむ人の姿
眺望	絵画的風景 大和絵めいた（赤松）、一幅の絵（嵐峡の碧潭）、さし交はした枝の間から仰ぐ空
	山容 すぐれた山容、嵐山の形ち、山のたたずまひ、野をへだてて低くつらなる北山、幾段にも重なり合った山々
	俯瞰 嵯峨野が目の下一眸のうち（眺望）
肌触り	湿り勝ちな道・石の濡れて光る道（秋・時雨）、薄暗い木下間
音	虫（春蟬、蛸）、竹と竹のすれ合う音、時雨の渡る音、沼の静けさ、百鳥のこゑ、牛の鳴き声、鐘の音

（c）発見された嵯峨野の新たな景物

表2に整理した嵯峨野の道の風景を、その特性によって整理・分析を行ったのが表3である。彼らが描いた嵯峨野の道には、伝統的景物の範疇にない景物が描かれている。高桑は上嵯峨逍遙に出会う美しい風景の一つとして「手前は一面の茶畑で、その中に茶を作る粗壁の家が二棟、風情のある形で並んでゐる」風景を挙げた。他もその二、三を示せば、野の道の「雑木林」や、「山々を眺めながら歩く野の道」、「さし交はした枝の間から仰ぐ空の美しさ」、「太陽の光に輝いてゐる自然のすがた」、「山懷に点々と立ち並ぶ農家」などが描かれた。これらは、和歌にも近代以前の名所案内記にもあまり見られなかった景物である。

彼らが好んで描いた嵯峨野の風景は、野の樹木や雑木林、草花、集落景観、農民や牛の添景人物などであった。「豆植うる畑も木部屋も名所かな¹⁴⁾」（凡兆, 1691）と詠われた名高い名所である嵯峨野においても、平凡とも言える野の風景自体に美が見出されるようになった。彼らは独歩と同様に、歌枕や物語、従来の景物という名所の枠組みから離れて、嵯峨野独自の野の風景を発見したといえる。

このような新たな風景の発見も決して古典的な景色と区別されたわけではなかった。近代以前から嘆賞されてきた史蹟の景色や物語の景色を継承しながら、近代以降

にはそれらに加える形で、名所周围の野の風景を新たに発見したのであり、近代以前の景色は失われたわけではなかった。

（3）郷土風景としての意義

近代以降、武蔵野などの東京郊外が都市化によって急激に変化したことを受けて、大正末期から昭和戦前にかけて、その田畑や雑木林で構成される郊外の農村風景を「郷土風景」として保存しようという議論が起こった¹⁵⁾。その議論は全国に広まり、京都もその影響を受けた¹⁶⁾。その議論の中心人物として田村剛がいた。本項では、彼らが「郷土風景」とした風景の位置づけと、その評価について明らかにしたい。

田村は「郷土風景保存の急務」¹⁷⁾ (1921) のなかで、風景を自然（原始的風景）と人文（文化的風景）との二つに大別し、そのなかで文化的風景を、①史蹟、②名勝、③過去に於ける郷土を記念する風景（郷土風景）、④現代の風景（文明風景）、に細分した。田村はこれらのなかでも郷土風景の保存を最も強く訴えている。郷土風景の価値については、武蔵野の例を挙げ、「殊に傑出した風景でなく平凡なものであつても、夫が過去に於ける郷土の風景の形式を保存してゐるといふやうな時」に、その風景は貴重なものであるとしたが、郷土の風景は「あまりに珍しからぬが故に、多くの世間の注意を惹かなかつた」ために容易に失われた。日本国内の造園学者の間で、このような平凡な風景が、鑑賞の対象としてだけでなく、史蹟や名勝と同様に保存の対象とされたことは風景保全の歴史において大きな変化であった。このような思潮の中では、前節までに述べたような、大塚らが発見した嵯峨野の野の風景が保全の対象とされてもおかしくなかった。

また郷土風景の保存方法について、田村は「郷土風景保存を主とするものは、県立公園又は市町村立公園とするが最も宜しい」とした。保存の対象である「郷土の自然や建設物や習俗や名物や、夫等は何れも公園構成上の要素である」とし、公園という保全制度の枠組みの中で有形・無形の風景を一体的に保全すべきだと唱えた。

3. 風景の保全と利用における嵯峨野の評価

（1）嵯峨における風致保全行政

（a）京都近郊の山辺の公園としての位置づけ

近代以降、都心部における土地利用の変化や公害をはじめとする居住環境の悪化に伴い、都市近郊の豊かな自然環境が見直されるようになった。嵯峨野のような京都周囲の山辺や名所旧蹟は、従来は主として遊覧や信仰の

対象として存在していたが、「近来は京都を始め大阪、神戸等附近の大都会の住民によつて、大自然の中に於ける保健、休養、教化を目的として益々盛に利用されんとしつつある¹⁸⁾」(1933)というように、交通機関の発達による訪問の簡便さから、都市の住民は京都の山辺の「豊かな自然環境」に価値を見出すようになった。

行政も京都近郊の山辺が「公園の代用をなしている」ことを意識し始め、「郊外の天然風物を利用し、之に公園の施設を加へ自然式な公園として」新たに整備すべきとする¹⁹⁾など、京都の山辺の自然環境を公園事業のために積極的に利用しようとした。高田景(当時の市の土木局長)は公園の意義として、①市民の保健衛生、休養、慰安、②都市の防災保安、③市民の教化訓育、運動體育、④国防、⑤土地の経済価値の増進、の5点を挙げ、これらの意義を増すためにこそ整備を行わなければならないとした²⁰⁾。このように、近代以降京都の山辺は天然の公園としての位置づけを強めつつあったが、昭和初期になってそれらはより積極的に整備・活用される対象となった。

(b) 風致地区の指定と小倉山公園計画

昭和5～7年にかけて京都の山辺の大部分が、嵯峨野においては「平地部における嵯峨廣澤池畔より大覚寺を経て野々宮神社方面に至る一体の地」²¹⁾が、都市計画法に基づく風致地区に指定された。この都市計画法風致地区の指定は、史蹟名勝天然記念物の指定と併せて「いはゆる名勝の保存にも重大な貢献をなすもの²²⁾」として期待された。さらに、風致地区の指定にとどまらず、昭和8年頃から京都府によって「小倉山公園」の創設が議論されていた。それは、亀山公園(8万㎡)の拡張も含めた110万㎡の大公園の計画であった。結論からいえば本計画は頓挫したが、当時の嵯峨野に対する風景保全の思想を知る上では重要であろう。「小倉山公園創設計画書²³⁾」(京都府社寺課, 1933)によると公園創設の目的には、①嵯峨野の名所と京都の喧伝、②精神の涵養と保健衛生上の貢献、③京都西北部の大発展の助成、の3つが挙げられており、これは当時の一般的な公園行政の趣旨と重なる。

本公園の空間整備は、既存の自然環境を損なわないように注意を払いながらも、小倉山山頂への道路の新設と山頂の開拓を行うものであった²⁴⁾。行政は「自然公園として機能の發揮に努むる」ことを重視し、「山頂の展望は四囲の風光の変化尽くる所を知らず、ここに大芝地を設け、園遊上に當て、運動散策に供す」と、道路系統の利用による都市と公園の連結を意図した。計画のこの段階(1935)では、数多くの名所が集まる小倉山山麓部の保全利用について議論されることはほとんどなく、あくまで小倉山の自然環境のみに主眼が当てられた観光開発

が主な目的であった。このような行政の小倉山廻遊道路など道路の整備重視の方針に対して、北尾は景色を眺める場所としての歩く道の整備を考えるべきであると批判的に訴えた²⁵⁾。

(c) 保勝会による風景保全運動

昭和9年3月には、嵯峨(清瀧、愛宕を含む)と松尾を保勝区域とする嵐山保勝会が結成された。本会は、嵐山の旅館、飲食店、通船・鉄道会社等の住民を主体とする人員によつて構成され、その事業内容として「公園、遊園地及観光に伴ふ諸施設の計画並実施」から、「建築物、工作物又は土地に関する工事、竹木土石類の採取等に関する相談、手続、指導」や、「風致維持並土地の開発に関し府市の諮問に応じ又は建議」まで、重要な風景保全運動を行っていた(図2)。この嵐山保勝会は、京都保勝会や三尾保勝会とともに、行政とは異なる役割を担い、「地元において風光名勝の保存に最も有意義な事業をなし精神的および経済的にめざましい成績を挙げつつ」あると評された²⁶⁾。

第二章 目的	
本會ハ地方ノ景勝地特性ヲ保育スルト共ニ觀賞樂ヲ施設シ且ツ地方ノ發展ヲ圖ルヲ以テ目的トシノ事業ヲ行フ	一、景勝地特性ノ調査、研究、保護
	二、公園、遊園地及觀光ニ伴フ諸施設ノ計畫並實施
	三、遊覽者ノ便益ヲ計ルコト
	四、遊覽ノ宣傳
	五、景勝區域内ノ建築物、工作物又ハ土地ニ關スル工事、竹木土石類ノ採取等ニ關スル相談、手續、指導
	六、地方ノ繁榮發達ノ企畫
	七、營業者ノ統一改善
	八、講演會、講話會、座談會等ヲ開催スルコト
	九、風致維持並土地ノ開發ニ關シ府市ノ諮問ニ應ジ又ハ建議ヲナスコト
	十、其他本會ノ目的ヲ達スル爲ニ必要ナル事項及本會ノ補助又ハ後援ニ合致シタル事業ノ補助又ハ後援

図2 嵐山保勝会の運動趣旨「嵐山保勝会規則²⁷⁾」

(2) 嵯峨野の風景の経済的意義

(a) 行政による風致経営の思想

大正末から昭和戦前における京都の風景の保全は、利用すなわち観光開発と一体となったものであった。大正10(1921)年の「京都都市計画」では、京都市の周囲に「遊覽道路」をめぐらし、「市の東北西の山及山に近き平原は主として自然美工芸美を基調とする遊覽都市として経営」を目論んだ。風致地区指定(1930-32)において京都府土木部は、京都は工業地でも商業地でなく観光地であるために開発の重点も観光に置くべきであることを強調し、さらにその開発の基礎となるものは「自然の風致」であり「風景資源」であるとした²⁸⁾。そして、風致の保存・開発における意義として、経済的意義を最も重視した²⁹⁾。ここでは風景は経営されるべき資源であると見なされたのである。そして、郊外の自然環境を都市部と結びつけるために、遊覽道路の整備、遊覽設備の充実が重要視された。

当時の京都府にとっての「風致維持」とは「単に一部

風流人の懐古的・有閑的満足のための現状固執とは全然反対」であって、①地形整理、開拓、排水改善、②森林の間伐、③道路や鉄道の敷設、④建築物の意匠形態や色彩の制限、などの開発を含んだ、人間による自然環境への積極的な介入が不可欠なものであった³⁰⁾。

この行政の方針に対して批判的に論じた人物に保田與重郎がいる。保田は「近代に於いて京都市は、自身の性格を以前より極端に遊覧都市化した³¹⁾」とし、近代以前から継承されてきた史蹟名所が、観光事業によって遊覧道路網のなかの遊覧施設として位置づけられたことについて、「我々の史蹟風景観を、国際的遊覧事業の風景観に即して歪め去つた」とし、行政による観光事業主体の風景の経営を批判した。

(b) 嵯峨における観光地経営・住宅地経営

近代以降の嵯峨は、鉄道敷設と道路整備によって急激に観光地化が進み、宅地化が進んだ。昭和初期はその基盤整備が整った時期である。明治 30 年(1897)に京都鉄道(二条-嵯峨間)が二条・嵯峨間に鉄道が開通したのを皮切りに、明治 43 年(1910)には嵐山電車軌道嵐山本線(四条大宮-嵐山間)が、昭和 3(1928)年には京阪神急行電鉄(桂-嵐山間)、その翌年に愛宕山鉄道(嵐山-清瀧間)と愛宕山ケーブル(清瀧-愛宕間)が開通し、現在のような鉄道を利用した観光のための基盤が出来あがった。これらの鉄道事業の活発さからも、嵯峨において自然美と名所旧跡を活用しようとする観光開発の熱意が強かったことが読みとれる。

鉄道網の整備に比べて、道路網の整備は遅れた。小林吉明(前嵯峨村長)は「鉄道の開通と云ふことが著しく嵯峨の面目を新にし、嵯峨の気分を変えた」とは認めながらも、嵯峨町の発展のためには、「道路が一番肝腎であつて」、「鉄道が続々出来て来ても、道路の便がなくては決して発展しない」とし、道路整備の重要性を訴えた³²⁾。さらに小林は、京都市の市域拡張と、嵯峨への循環道路の整備を受けて、「車折神社の裏から新宮、一本木、廣澤、大澤間、仙翁寺、小倉山一帯の場所などは、固より風景もよし、(中略)それが今日まで発展せずにをつたのでありますが、この道路が完成した暁には、住宅地もしくは別荘地として」大発展することは明らかであるとした³³⁾。ここでは、嵯峨野の風景は、宅地開発とそれに伴う発展のための資源として捉えられている。

この頃既に武蔵野などで、その変貌する風景の保全に関する議論が活発であったが、嵯峨野では宅地開発による風景の変容は軽視され、その経済効果のみが重視されている。それは、小林が「(嵯峨野が)ここ三年五年後の暁には殆ど今昔の感に堪えないやうに、土地の様子が変る」ほどの開発発展するとしながら、それについては「之を歓迎して、それぞれ出来るだけ便利を與へ、然う

して自分ら(嵯峨町)も利益を蒙るやうに努めなければならぬ」と述べたことに表れている。

(c) 嵯峨の変貌に対する風景保全の訴え

前項までに述べたような、開発をより重視した行政の方針に対して批判がなかったわけではない。近藤伊与吉は、「風流を尊ぶ嵯峨野」に「嵐電が轟々と疾走」し、愛宕山ケーブルが愛宕山の山容を害していること、「急速なテンポと絢爛たる色彩と新鮮な刺激に棲息しようとしてゐる」ことを歎き、嵯峨を少女歌劇や新温泉でにぎわう宝塚のようにするなと訴えた³⁴⁾。北尾は廣澤池周辺について「古い私の記憶では、幽翠な、都会ばなれのした凄いほどの景色であつたのだが、いまでは真白な自動車の砂埃である」と批判的に述べた³⁵⁾。また、下嵯峨在住の日本画家・富田溪仙は、「嵯峨は嵯峨にしておくべきものだ、あまりいぢり廻すと嵯峨になる、がさつになるのだ(中略)嵯峨人くらい嵯峨を知らんものはない。嵯峨を葬らんとするもの、まづ大てい嵯峨人にあらずんば、京都人といふことになるから、けしからんだ。」と、嵯峨の開発に伴う変貌に対して、昔ながらの風流を尊う嵯峨の景観を保全するよう訴えた³⁶⁾。このように、作家や画家などの行政以外の立場の人々の間では、行政の訴える風景の活用と保全は必ずしも評価されていなかった。

4. まとめ

昭和初期の嵯峨という人々の風景に対する関わり方が変化しつつあった時代と場所を取りあげ、作家や行政などの立場によって異なる風景の価値評価について考察を行ってきた。

嵯峨野の主な観光対象には神社仏閣や歌枕、旧蹟があり、近代以降に生まれた川下りや公園なども観光の対象となっていた。鑑賞対象の中でも建造物や什宝などの文化財が重視されていた。また、大塚らによる随筆には、観光案内記にはほとんど取りあげられなかった道の景色や野、農村の風景が詳細に描かれ、彼らによって嵯峨野独自の美が見出された。そういった意味で嵯峨野の風景の価値は広がりを見せた。

行政による風景保全は、豊かな自然環境による保健・休養・教化をその目的としながらも、その主眼は「風景資源」の活用とそれによる経済的恩恵にあった。日本国内を見れば一部で「郷土風景」の保全としての動きはあったが、嵯峨野においては「懐古的・有閑的」な満足を得るための風景に価値は見出されず、宅地開発や公園事業などを通じた環境整備による経済発展が重視された。本論で明らかにしたような、作家らが発見した平凡とも

言える野の価値ある風景は、嵯峨野においては保全の対象にはならなかった。それに対して、一部の人々の間で嵯峨野の風趣が失われていることに対する反発があった。

以上のことは都市や郊外の持続可能な風景づくりを行っていく上で参考になるものであり、次のようなことを示唆しているだろう。風景の価値評価においては多様な側面があり、風景の保全と一言で言っても、その捉え方によって全く異なった行動を生む可能性がある。どのような風景を残すかという意志決定は、非常に重要であり、様々な側面から評価する必要がある。

さらに、嵯峨野で大塚らが発見したような、豊かで広がりのある風景を保全するためには、よりきめの細かな風景保全の施策が必要である。何をどう残すのかという問題を都市計画的な視点から大きく捉えるのではなく、歩行者の視点からみた風景をどう残すかを考えるべきであろう。

参考文献・注

- 1) 日本造園学会：ランドスケープ研究, vol. 69-2, 2005
- 2) 元学区の名にみられるように、嵯峨野と嵯峨はもともと異なる地域を指す地名であったが、現在一般的にはほぼ同義で使われている。本論では正確な地名として用いるときの「嵯峨」を用い、それ以外は「嵯峨野」を用いた。
- 3) 樋口忠彦、杉山公彦：明治期東京の名所の変遷過程について、日本都市計画学会学術研究発表会論文集, 17 号, p511-516, 1982
樋口忠彦：郊外の風景, 教育出版, 2000
羽生冬佳、岡野祥一：江戸の伝統的名所の特性と明治以降戦前までの名所としての価値の変遷に関する研究, ランドスケープ研究, vol. 66, p456-460, 2003
- 4) 勝原文夫：明治以降のわが国における風景論、農の美学, 論創社, 1979
- 5) 前掲、郊外の風景
山根ますみ・篠原修ら：武蔵野のイメージとその変化要因についての考察, 造園雑誌, 53(5), p215-220, 1990
- 6) 中林浩：1930 年代における景観・都市美についての計画理念 - 京都府における風致地区行政をつうじて -, 日本都市計画学会学術研究発表会論文集, 17 号, 1982
赤坂信：1930 年代の日本における「郷土風景」保存論, ランドスケープ研究, 69(1), p59-65, 2005
中嶋節子：近代京都における市街地近郊山地の「公園」としての位置付けとその整備, 日本建築学会計画系論文集, 496 号, p247-254, 1997
- 7) 京都市都市計画局編：嵯峨野鳥居本町なみ調査報告, 1976
中林浩、小伊藤直哉、松浦行雄：嵯峨・太秦地区の景観計画, 景観構想の基本的な考え方など, 日本建築学会近畿支部研究報告集, p473-484, 1986
- 8) 高木博志：史蹟・名勝の成立, 日本史研究, 1991, p63-88
- 9) 『元禄 14 (1701) 年の実測大絵図』に描かれた景観との比較による
- 10) 昭和初期の嵯峨野の風景を描いた代表的な案内記として、北尾鐮之助の『京都散歩 近畿景観 5 編』（創元社, 1934）,

大塚五郎の『嵯峨野の表情』（京阪電気鉄道, 1939）, 『京都風土記』（大雅堂 1942-43）, 高桑義生『洛西景観』（高桐書院, 1947）がある。

- 11) 大塚五郎：嵯峨野の表情, 京阪電気鉄道, 1939
- 12) 國木田独歩：武蔵野, 岩波文庫, 1972
- 13) 前掲、郊外の風景, p57
- 14) 松尾芭蕉著、井本農一・久富哲雄校注・訳：松尾芭蕉集 2, 嵯峨日記, 新編日本古典文学全集, 小学館, p154, 1997
- 15) 赤松によって、郷土風景保存論の史的考察がされている。
- 16) 昭和初期には京都の山林の景観が郷土風景保存の対象となっていたことが中嶋節子によって指摘されている。中嶋節子：昭和初期における京都の景観保全思想と森林施業, 日本建築学会計画系論文集, 459, p185-193, 1994
- 17) 田村剛：文化生活と庭園, 成美堂書店, 1921
- 18) 関口英太郎：郊外の緑地・京都の山・山火事, 庭園と風景, 15 号, 1933
- 19) 高田景：大京都の都市計画に就て, 48-49 p, 1931
- 20) 前掲、大京都の都市計画に就て, 48-49 p
- 21) 京都市：京都都市計画風致地区追加指定理由書, 京都都市計画概要, 京都市, p53, 1944
- 22) 佐上信一：京都風致地区の設定, 大阪毎日新聞社京都支局編：京都新百景, 新時代社, p435-450, 1930
- 23) 京都府社寺課：小倉山公園創設計画書 昭和 8 年, 京都府庁文書, 明治 29 年～昭和 16 年 各公園一件綴, 1941, 京都府立総合資料館所蔵
- 24) 京都府社寺課：嵐山公園拡張計画調査書類 昭和 10 年 8 月, 京都府庁文書 明治 29 年～昭和 16 年 各公園一件綴, 1941, 京都府立総合資料館所蔵
- 25) 北尾鐮之助：京都散歩 近畿景観 5 編, 創元社, p39, 1934
- 26) 前掲、風致地区に就いて, p32
- 27) 嵐山保勝会：観光の嵐山, 嵐山保勝会, 1936
- 28) 京都府土木部：風致地区に就いて, 京都市都市計画, p10-13, 1934
- 29) 前掲、風致地区に就いて, p8-9
- 30) 前掲、風致地区に就いて, p32
- 31) 保田與重郎：遊覧都市京都(1943), 銃後の京都, 保田與重郎全集 19 卷, 講談社, 1987
- 32) 小林吉明：嵯峨町政の過去及未来, 小林吉明, 1929
- 33) 前掲、嵯峨町政の過去及未来, p24
- 34) 近藤伊与吉：嵐山文化村, 都新百景, 新時代社, p377, 1930
- 35) 前掲、京都散歩, p81
- 36) 富田溪仙, 大毎美術 13 巻 3 号, 1934, 史料京都の歴史 14 右京区, 平凡社, p484, 1979

(2006.4.17 受付)